

國學院大學学術情報リポジトリ

柿右衛門様式研究：文様と構図の分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松浦, 里彩, Matsuura, Lisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002470

本論は、十七世紀後期の肥前磁器の中でも、特に、延宝期を中心に展開した絵付けの特質について、文様の表現と配置の観点から分析、検討し、その構成要素や成立背景を明らかにすることを目的としている。

本分析は、延宝期の絵付けの特質を解明するだけではなく、肥前磁器の生産窯特定や編年分析への活用が期待でき、西欧への輸出も盛んであった肥前磁器の需要や東西の文化交流についても、絵付けの観点から考察することが可能である。

また、本研究は、絵画や他の工芸など複数の分野から知見を得ており、その成果は他の分野の研究にも活かすことができよう。

肥前磁器とは、肥前地方（現在の佐賀県・長崎県域）で生産された磁器の総称である。十七世紀初頭にはじまった肥前地方の磁器生産は有田の地を中心としたが、出荷港の名に因み伊万里焼、とくに古いものを古伊万里とも呼ぶ。

肥前磁器の研究は、近年、考古学的な手法による産地と消費地の分析が深化され、特に編年研究が精力的に進められてきた。その結果、十七世紀の肥前磁器は主に、寛永期（一六二四～一六四五年）の「初期伊万里」、正保（一六四五～一六四八年）～寛文期（一六六一～一六七三年）の「初期色絵」（いわゆる古九谷様式）、延宝期（一六七三～一六八一年）の「柿右衛門様式」、元禄期（一六八八～一七〇四年）の「古伊万里金襴手様式」へと変遷したことが明らかにされている。

十七世紀後期の肥前磁器は、延宝期頃にその主流をなす作風を確立したと考えられている。赤や青、緑、黄を基調とした明るい色彩と繊細な線描で表される文様、乳白色の「濁手」と呼ばれる素地が際立つような文様の配置で構成される世界観が印象的なそれは、現在「柿右衛門様式」という名称で親しまれている。中でも、延宝期頃の作と推定される、白く滑らかな素地に淡く明るい色彩で文様を施した「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」（佐賀県立九州陶磁文化館蔵）は代表的な存在であろう。このような作例は主に輸出用とされ、西欧の王侯貴族たちに収集されるにとどまらず、彼らの生活や文化にも大きな影響を与えた。

しかし、詳しくは後述するが、十七世紀後期の肥前磁器の中でも、延宝期を中心に発展し

たとえられる作風や造形の傾向を特徴的に捉え、柿右衛門様式と称したのは後世のことである。研究の発展とともに様式の定義や概念はより明確化されたが、その枠組みには現在でも研究者によって捉え方の異なる部分や曖昧な点がみられる。また、従来の肥前磁器研究は、生産地や消費地、編年の分析といった考古学的手法が重点的にとられ、文様の描法や配置、構成など絵付けに関する緻密な分析は長く今後の課題とされてきた。

そこで本論では、十七世紀後期の肥前磁器、特に延宝期を中心に展開した磁器群を論の中心に据え、絵付けの分析に取り組むこととした。分析を行うにあたり、まず、様式分類の名称のひとつもなっている、柿右衛門という語に集約された定義や概念の成り立ちを追い、現状を捉えるとともに問題点を探った。そして、肥前磁器における赤絵の創始について史料を用いた考察を加え、柿右衛門様式という名称で括られることとなった対象の作風を把握するとともに、製作年代を確認または推測できる資料をもとにそれらが定着した年代を推測した。

これらの考察を踏まえた上で、本論の主要テーマである、延宝期の肥前磁器にみられる絵付けの構成要素や成立背景の解明に向け、図様を構成する最小単位である文様に注目し、その表現と配置の観点から分析を行った。

具体的な方法として、文様の表現ではモチーフごとの分類にはじまり、文様の形態や線描、色彩など主に描法の分析を試みた。文様の配置では、延宝期の肥前磁器に顕著な白い素地が際立つ構図について、文様が描かれている位置や文様同士の比率の変化に着目しその変遷を追った。さらに、同時代の絵画や他の工芸との比較分析も行い、ここに見られるような構図のあり方は、肥前磁器において特に延宝期に特徴的であるとともに、ジャンルを超えた時代的な傾向のひとつであることも明らかにした。

肥前磁器の輸出は十七世紀半ば頃に始まり、特に、輸出用であったと考えられている延宝期を中心に製作された磁器群は、西欧で高い需要を誇った。乳白色の素地から「milky-white」と称された製品は西欧の王侯貴族たちを魅了し、城郭や宮殿内に設置された「磁器の間」と呼ばれる専用の部屋に飾られ、東洋的な趣味としてだけでなく権力の象徴としても求められた。そして、それは熱狂的な収集にとどまらず、西欧諸窯での磁器生産開始の契機のひとつともなり、日本ではすでに生産・輸出が下火にあったと考えられる十八世紀以降もドイツのマイセン窯をはじめイギリスのチェルシー窯など、西欧諸国で模倣品が作られるほどの人気を博した。

西欧緒窯の製品には、延宝期の肥前磁器に見られる作風を取り入れながら、文様や器形な

どを西欧風にアレンジしたと思われる作例も多くみられ、その傾向は十九世紀に起こるジヤポニスムでも確認できる。たとえば、当時のパリ万博にも出品されたセルヴィス・ルソーには、浮世絵など日本の絵画からモチーフを転用する傾向が指摘されるが、とりわけ植物や鳥、昆虫などの花鳥文様をまるで白素地に置くかのようにアシンメトリーに配置する構図は、延宝期の肥前磁器を思わせるのである。

これより、本論では、延宝期を中心に制作された肥前磁器が西欧での磁器生産や文化に影響を与えたという点について、いかなる時代背景があり、どのような要素がこれほどまでの熱をもたらしたのか考察した。

なお、本論の各章の組み立ては次のとおりである。

第一章では、延宝期の肥前磁器を扱う前提として、主にその時期に展開した作風や作例を指して用いる柿右衛門という語に注目した。先に触れたように、柿右衛門様式とは、十七世紀後期の肥前磁器の中でも、特に延宝期を中心に発展した作風や造形の傾向を特徴的に捉えて称したもので、様式としての枠組みは後世に提唱された。柿右衛門に関する研究が活発化したのは大正期に入ってからであり、様式概念として唱えられるようになったのは昭和期半ば頃のことである。現在でも、様式の定義や概念の捉え方には研究者によって異なる部分もあり、解釈の広がりや認識に曖昧な点もみられる。

そこで、本章では、柿右衛門、柿右衛門様式、濁手の三つの語に焦点を当て、柿右衛門という語の発生から、従来組み立てられてきた柿右衛門観や柿右衛門様式と称される様式概念が定着するまでの成り立ちを追い、改めて研究史を整理した。

わずかに残されている江戸期の史料には、そもそも柿右衛門とは細工者の名であることが記されている。明治期に入ると、赤絵の創始者として酒井田柿右衛門の研究がはじまり、大正期には大河内正敏氏による『柿右衛門と色鍋島』（彩壺会一九一六年）が発表され、歴代酒井田柿右衛門の生没年の明記や具体的な作例が提示されるなど、柿右衛門概念の基礎となる詳細な研究が行われるようになった。昭和期になると、永竹威氏による肥前古陶磁の様式論が提唱され、陶工柿右衛門の存在はそのままに、様式としての柿右衛門が定着しはじめる。

しかし、近年行われた発掘調査から、従来の柿右衛門個人の作という概念は崩されることとなり、現在では有田町全体で生産された作風のひとつであると解釈されるようになった。それでも柿右衛門という個人名は用いられ続け、現在はいわゆる「典型的な柿右衛門様式」

（狭義）と広義の柿右衛門様式といった濁手に重点を置く捉え方が主となっている。

濁手と呼ばれる乳白色の素地は、現在柿右衛門様式を捉える際の大きな一要素であり、特に典型例に必須の条件とされている。はじめに乳白色の素地に注目し、優れた特徴のひとつとして提言したのも大河内氏であると考えられるが、その後、乳白色が洗米のとき汁に似ていることから濁手という名称がつけられ、特徴的な素地として扱われるに至っている。

確かに、延宝期の肥前磁器にみられる白素地の色調は、それまでの色絵素地よりさらに白さを増していると思われる。しかし、その色調には明確な基準がなく、研究者によって捉え方が異なることや、昭和六十三年に行われた赤絵町の発掘調査では、遺構の最下層から濁手とする色調に近い乳白色の陶片が出土していることなど、検討すべき点はまだ多く、全貌の解明には課題が残されている。

第二章では、前章で行った柿右衛門に関する定義や概念の研究史の整理を受け、十七世紀後期の肥前磁器にみられる絵付けについて、史料や研究史に基づき検討した。着目したのは、（一）肥前磁器における赤絵の創始者と創始時期、（二）延宝期の作風形成年代、（三）延宝期の具体的な作風と柿右衛門様式と捉えるための条件の三点である。

（一）肥前磁器における赤絵の創始者と創始時期

肥前磁器における赤絵の創始について、確認できる最古史料のひとつである初代酒井田柿右衛門による「覚」、三代酒井田柿右衛門の「申上口上」、当時の皿山代官であった大石軍兵から五代酒井田柿右衛門へ送られたとされる文書より、初代酒井田柿右衛門の関与が認められると推測した。また、その創始時期として、初代酒井田柿右衛門と三代酒井田柿右衛門の文書に加え、「今利」、「赤絵」「錦手」という語の初見史料から、一六四〇年代、特に一六四一〜一六四七年の間に成立したのではないかと推測した。

（二）延宝期の作風形成年代

延宝期の作風がおよそどの年代に確立したのかということについて、本論では、①京都西本願寺の経蔵の腰張りに使用された「色絵唐草団龍文陶板」（福岡県立美術館蔵）と「色絵応龍文陶板」（東京国立博物館蔵）、②発掘陶片から製作の下限年代が推測できる「色絵竹梅鳥文輪花皿」（佐賀県立九州陶磁文化館蔵柴田夫妻コレクション）、③絵画から製作の下限年代が特定できる「色絵唐人物文蓋付大壺」（東京国立博物館蔵）の三例を取り上げ考察した。

その結果、現在まで認識されてきた延宝期頃の作風は、主に一六八〇年代を中心に定着したのではないかと推測した。

(三) 延宝期の具体的な作風と柿右衛門様式と捉えるための条件

前章で行った研究史の整理から、現在の柿右衛門様式は「典型的な柿右衛門様式」と「広義の柿右衛門様式」に分類して捉える傾向にあることを確認した。典型的な柿右衛門様式とされるものには基準が設けられており、絵付けに関しては主に、①濁手素地、②繊細な輪郭線、③明るい色彩、④左右非対称で余白を多くとる絵画的意匠といった要素があげられる。

一方、広義の柿右衛門様式では捉え方の幅が広がる。大きな点として、典型的な柿右衛門様式の一要素とされる濁手素地であるが、染付の使用は不向きとされているため、染付が用いられている時点で典型例から外れていくこととなる。また、染付の使用例以外にも、赤や緑などの色彩が目立ち色調が濃い例など、典型例とは異なる要素を持つ作例が含まれる。

つまり、延宝期の作風を捉えるには、いわゆる「典型例」と「広義例」を合せたものがその全貌ということになると考えられる。しかし、「典型例」という基準を設けたからこそそこに準ずる要素が引き出せ、延宝期の肥前磁器の全体像をつかむことにつながるのではないだろうか。

第三章では、文様の表現について分析を行った。延宝期の肥前磁器にみられる特徴を把握するにあたり、本研究では、江戸時代初期から幕末までの有田磁器を幅広く有し、肥前磁器の作例を網羅できる一大コレクションである佐賀県立九州陶磁文化館所蔵「柴田夫妻コレクション」を軸に、適宜参考となる作品を加えながら約四〇〇〇件の作例を分析対象とした。

具体的な方法として、まず、十七世紀を中心とした肥前磁器にみられる主な文様から、普遍的にみられる【A】松、【B】竹、【C】梅の植物や【D】鳥類、【E】一六五〇年代以降みられるようになる柴垣、用いられることの多い【F】菊、【G】蝶の七種類を取り上げそれぞれに基準を設けて分類した。そして、各モチーフの中で分類した項目ごとに描かれ方をまとめ、延宝期頃の作例にみられる表現が分類項目のどこに該当するのか、延宝期の前後で変化がみられる場合はどのような変遷があるのか分析した。

その結果、一例として、延宝期の肥前磁器に描かれる松では幹の色彩に、梅では花の形態に他の年代にみられるものとは異なる表現が認められた。ただし、時代に伴う変化がみられないモチーフもあり、その場合は普遍性の高い表現がされるものとした。

そして、この文様分析の活用を試論すべく、本論では梅文様を一例に『柿右衛門様式総合調査事業報告書』（佐賀県立九州陶磁文化館一九九九年）に掲載されている、柿右衛門古窯出土陶片のトレース一覧を用いて検証した。すると、本論で分類した形態の多くが確認でき

た一方で、他の年代にみられるものとは異なる表現が認められた延宝期の形態は確認できなかった。これより、本論で抽出した延宝期にみられる梅の形態は、同窯で製作された作例には用いられていない、または同窯の操業期間の主要な形態ではなかったことなどが考えられ、文様の分析は生産窯や制作年代の特定に活用できる可能性が見いだせた。

また、文様の分析を行うとともにモチーフの組み合わせにも着目した。延宝期の肥前磁器にみられる図様には、下絵に狩野派や土佐派といった絵師の関連が示唆されている。本論では、モチーフの組み合わせにバリエーションがあることから、需要の高さがうかがえる鶺鴒文様を取り上げ、絵画作例との比較を行った。

その結果、鶺鴒文を主題とする肥前磁器には絵画との類似点が多くみられたが、モチーフの組み合わせや景観表現などの細部、特に地面の表現に大きな違いがみられた。さらに、そのような差異は、十七世紀の肥前磁器においても時代による表現の変化として現れており、延宝期の図様の特異性を強める一要素であることが明らかとなった。

第四章では、文様の配置について分析を行った。延宝期の肥前磁器には、白い素地を際立たせるような構図が顕著であり、それは文様の配置や構成によって成り立っていると考える。そこで、文様の配置方法や文様同士の比率の変化から、このような構図ができるまでの変遷過程を分析した。

具体的には、分類の基準や方法は第三章と同じとし、特に配置面に変化がみられた【B】竹、【D】鳥類、【E】柴垣、【F】菊、【G】蝶文様を対象とした。

分析の結果、延宝期に描かれる文様は器面の片側に重点的に配置される傾向があることや、配置場所や文様同士の比率に変化が表れやすいのは空中を移動できるモチーフに多いことなどが明らかとなり、文様の配置と構成には明確な意図がある様子がうかがえた。また、この傾向は延宝期以前から徐々に変化してきたものと考えられ、延宝期に顕著な白素地の際立つ構図が定着するまでの変遷過程を明らかにできたことは大きな成果である。

加えて、白素地の際立つ構図が延宝期に顕著である点について、どのような背景が推測されるのか考察した。本論では、同時代の絵画作例や和鏡などの工芸品、小袖などの染織品と比較した結果、文様を画面の右側に集中的に配置する傾向が共通してみられ、中でも皿と同じ円形の和鏡では、十七世紀から十八世紀中頃までの作例に類似する図様が認められた。

磁器と和鏡に共通または類似する図様の存在が確認できたことから、これらの原案は絵画にあるとも推測できる。明確な下絵の特定や下絵師に関する資料などは確認されていない

いが、これらが連動するように同時期にみられるという点においても、工芸と絵画、さらには工芸間の相互影響がうかがえる。これは、時代的なひとつの大きな傾向として捉えることができ、白素地の際立つ構図が成立した背景の一因には、国内における流行が推測できるのである。

第五章では、延宝期の肥前磁器における輸出について、第三章ならびに第四章で分析した結果を踏まえながら、冒頭で提示したように、筆者が延宝期頃の肥前磁器の代表作と考える「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」の作品分析を通し、西欧においてどのような要素が求められ需要を高めたのか考察した。

延宝期に制作された肥前磁器が主に西歐向けの輸出品と考えられているのは、これらの磁器が国内ではほとんど確認できなかったのに対し、国外の伝世品として多く確認できたことに由来する。現在、柿右衛門と称されるこのような磁器群は、特にドイツ・ザクセンのアウグスト強王によって熱烈に収集され、一七〇九年には強王の主導のもとドイツ・マイセンで磁器焼成に成功し、多くの模倣品が製作されるほどの影響を与えた。

十七世紀後期に日本の磁器輸出が盛んになったことには、中国明末期に起こった内乱に伴う海禁政策も大きく関係しているといえよう。当初、肥前磁器は中国からの輸出が停止した際の代替品として求められたと考えられるからである。しかし、展海令後の中国磁器は、それまでの主力輸出品であった芙蓉手や赤絵から康熙五彩と称されるスタイルに変化しており、その作風は柿右衛門様式の磁器との関連も示唆されている。また、肥前磁器を模倣した例も確認されることから、延宝期の肥前磁器が独自のスタイルを確立し、輸出市場の中心にいた様子がうかがえる。

本論での文様と構図の分析結果からも明らかのように、延宝期の肥前磁器の絵付けには、他の製作年代の作例にはみられない文様表現や白素地の際立つ構図など、特徴的な要素が認められる。本論では、「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」だけではなく、類似する作例の「色絵柴垣松竹梅鳥文輪花皿」（個人蔵）もとりあげ、用いられているモチーフと文様の配置に注目して分析し、その需要や影響を与えた要素を探った。

その結果、モチーフでは柴垣と鶉が、文様の配置では白素地を際立たせる構図が好まれる傾向がみられた。特に、いわゆる余白のある構図は西欧の磁器製品にも積極的に取り入れられており、肥前磁器の文様配置を模しながら西洋の文様を用いるなどの発展もみられ、その影響は十九世紀に起こるジャポニスムにまで及ぶ。これより、延宝期の肥前磁器に顕著な構

図のあり方が、いかに西欧の磁器に大きな影響をもたらしたのか明らかとなった。

以上、本論では、研究史における十七世紀後期の肥前磁器と柿右衛門様式の捉え方を整理した上で、その絵付けについて文様の表現と配置の観点から分析し、構成要素や成立背景を明らかにした。さらに、これらは輸出用の磁器と考えられることから、国内外での影響や需要についても考察した。

また、本論での研究史の整理や文様の表現及び配置の分析、海外需要の考察を通し、白を極めたともいえる濁手と称される素地の存在の大きさを再確認することとなった。絵付けの土台でありながらそれ自身の鑑賞性も高いこの素地は、細密な線描と明るい色彩による絵付けや、素地が際立つような構図をとることを可能とし、このような絵付けがあるからこそ素地の存在も一層引き立てられていると考える。

柿右衛門様式と称される、十七世紀後期の肥前磁器を代表する作風は、素地や釉薬における技術の発展と、同時代の豊かな意匠性を反映した絵付けが絶妙のバランスで融合し成立している。そして、初期伊万里から積み重ねられてきた要素は徐々に洗練され、輸出を介することでより強化し、西欧においても絶大な需要を誇ることとなった。つまり、延宝期を中心にみられるこのような作風は、和と洋のテイストを併せ持つ、延宝期に成熟した肥前磁器のひとつの完成形なのである。